The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清輔本古今和歌集内裏切の一分類 : 顕昭注と基俊本校合を持つ内裏切
Author(s)	田島, 智子
Citation	詞林. 1987, 2, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

清輔本古今和歌集内裏切の一分類

―顕昭注と基俊本校合を持つ内裏切―

田島智子

はじめに

清輔本古今和歌集の断簡に、内裏切という名物切がある。内裏切という呼び名は、内裏に伝存していた為とする説もあるが、久曽神昇氏の「保元二年本（清輔本の一本。筆者記）の識語の初に『従坊御時召竜内裏』云々とあるによっての命名と考へられる」（注一）との説もあり、定かではない。

内裏切については、以前山岸徳平氏が、尊経閣文庫所蔵の保元二年本（以後前田本と呼ぶ。）の欠脱部分であると述べられたことがある（注二）。しかし、『古筆手鑑大成』の解説に指摘があるように、前田本の欠脱部分以上の断簡が残っているので、この説は当たっておらず、「内裏切は、幾種類かあると考える」（同解説）べきである（注三）。前田本の欠脱部分と認定できるのは、私が目にすることのできた内裏切の中では、『昭和新修日本古筆名葉集』（注四）の切のみなのである。

また久曽神氏は、「古筆家が内裏切と稱してゐる断簡が、清輔真筆であらう。」として縦二三・六糎、横一五・八糎、一面七行、和歌二行書の切があるとされているが、写真を載せておられないので、どのような切であるか不明である。更に、「なほ鎌倉中期以後の断簡で、内裏切と伝稱してゐるものも二三種存するが、何れも保元二年本のやうである。」（注五）とも述べておられるが、残念ながらこれも久曽神氏の考えておられる切は、不明である。

このように内裏切は、幾種類もあることが混乱を引き起こし、先の二氏以来詳しい研究が為されないままになっている。また古筆家によって内裏切とは呼ばれてはいないが、清輔本古今和歌集である断簡も数多く残っているので、事態は更に複雑になってこよう。しかし内裏切（以後本稿では、清輔本古今和歌集の断簡も含めて内裏切と呼び、古筆家によって内裏切と呼ばれていない断簡であることを明示することは、必要のある時のみにする。）には、久曽神氏の言われるように清輔真筆の古今和歌集が含まれているかもしれず、そうでなくても清輔本古今和

歌集の諸本研究に重要な役割を果たすことが推測されるので、このまま放置しておくのは研究上の損失と言えよう。本稿では、この混乱した状態の中からせめて一グループを分類し、内裏切研究の糸口としたい。

一、顕昭注との関わり

内裏切は管見に及んだだけでも、二十数枚の存在が確認できる。その中で、私が今問題にしようと思うのは次の八枚である。（注六）

巻一　春上　二（下句）～五（上句）【布留鏡】
巻四　秋上　一六九～一七〇（詞書）【蓬左】
巻八　離別　三六五～三六七（上句）　【見ぬ世の友】
巻十一　恋一　四八七（下句）～四八九、一一〇六、四九〇
　　【徳川黎明會所蔵・藁叢】
巻十四　恋四　六九六（下句）～六九九（上句）　【藁叢】
巻十六　哀傷　八三二～八三三　【藻鏡】
〃　〃　八五八（歌）～八五九（詞書）　【鳳凰臺】
巻十八　雑下　九五〇（下句）～九五四　【藻塩草】

これらの切に共通する特色は、まずその注にある。その他の内裏切の注は、現存の清輔本諸本とだいたい一致するのだが、いま挙げた八枚の切はそれ以上の注を持っている。

ここで、内裏切の位置づけをするために、清輔本の諸本についてふれておく必要があるだろう。清輔は幾度も書写したようであり、今日知られている清輔本には、

一、片仮名本（寛親本・天理本）
二、永治二年本（家長本）
三、仁平四年本（散逸か）
四、保元二年本（前田本・穂久迩本）
五、顕昭本（天理本・伏見本）

などがある。注が順次増加していっていることから、現在のところほぼこの順に成立したと考えられている。それぞれ、主に久曽神氏の『古今和歌集成立論』を参考にさせていただいて簡単な説明を加えておく。

一、片仮名本（識語は永治二年本のと全く一致しており、欄外注記を比較するに、その前稿本と知られる。）
　寛親本：片仮名本の最古写本である賀茂季鷹所持本を、天保二年に榎本寛親が虫食いまで忠実に書写したもの。下帖のみ。静嘉堂文庫所蔵。
　天理本：下帖のみ。

二、永治二年本（永治二年に清輔が書写したもの。）
　家長本：建仁元年に源家長が転写したもの。注記は片仮名本よりも著しく多くなっている。複製　『宮本長則氏蔵清輔本古今和歌集』　複刻日本古典文学館所収。

三、仁平四年本（毘沙門堂古今集註に引用されている識語など

からその存在が知られるが、現存せず。）

四、保元二年本（保元二年に清輔が書写したもの。）

前田本：元弘以前の古写本。清輔真筆とする説もあるが、種々の点から疑問視されている。清輔本を代表している。五箇所欠脱がある。複製　尊経閣叢刊所収　昭和三年。

穂久迩本：上巻のみ。鎌倉中期または後期書写。前田本よりも保元二年本の原形を伝える。翻刻「家長本清輔古今和歌集」（実践女子大紀要第五・六集　昭和三十二・四年　山岸徳平氏）

五、顕昭本（保元二年本に顕昭が加注校定したもの。）

天理本：伝家隆筆。前田本と同系統。

伏見本：片仮名本。識語によって顕昭の真蹟本と伝稱されているが、認めがたい。複製　『伏見宮旧蔵古今和歌集』宮内庁書陵部　昭和三十六年。

これらの中、遺憾ながら天理本（片仮名本）を調査することができなかった。だが『複製　伏見宮旧蔵古今和歌集　宮内庁書陵部　昭和三十六年』の解題によれば、片仮名本は勘注が少ないのだが、とりわけ天理本の勘注は寛親本に比べて遙かに少ないそうなので、本稿にはさしたる影響はないものと思う。

では改めて、八枚の切の共通点を明らかにしていこう。まず、『布留鏡』の切を例にとってみよう。本切は、

・或本タチイツル／ヤイツコ不可用之

・此后為五節／舞姫云々

・催馬楽歌也

・ハルカケテトハ／ハルニナリテ〈以下欠〉

という頭注と、

・ウクヒスノコホレル／ナミタトハトリノ／ナクニナミタヲツヘキ／ニアラネトナクトイ／フニヨセテヨメリ雁／ノナミタナトヨメリ／タトヒナミタアリト／モコホラムコトイカヽ／オホユレト冬モシ／ハ春モ雪フリサユ／ルニハ水ノコホル／ナラヒニヨセテウ／クヒスノナミ〈以下欠〉

という脚注を持つ。「此后……」と「催馬楽歌也」の注は、前田本を始めとする諸本にあり、「或本……」の注は、保元二年本まではまだないが、顕昭の加注校定が加わっているとされる伏見本及び天理本（顕昭本）にはある。しかし残りの二つの注は、私が見たかぎりの諸本に見られない。実はこれらは、『顕昭古今集註』又は『顕註密勘抄』にある注なのである（注七）。

「ハルカケテトハ／ハルニナリテ」

『顕昭古今集註』「梅が枝に」（歌番号五）の注

〈前略〉ハルニナリテムメガエダニ鶯ハナケドモ、ナホ冬ノヤウニ雪ハフルトヨメルナリ。

『顕註密勘抄』同

春かけてとは、春になり梅が枝に鶯はなけども、なほ冬の様に雪はふるとよめる也。〈後略〉

「ウクヒスノ……」

『顕昭古今集註』（該当注なし）

『顕註密勘抄』「雪のうちに」（歌番号四）の注

〈前略〉又鶯の氷れる涙とは、鳥のなくに涙おつべきにあらねど、なくと云によせてよめる也。雁の涙ともよめり。たとひ又涙ありとも、こほらむ事いかゞとおぼゆれど、冬もしは春も雪ふりさゆるには、水のこほるならひによせて鶯の涙をこぼらせたり。〈後略〉

このようにわずかな文言の違いはあるが、だいたいにおいて一致している。なお、『顕昭古今集註』と『顕註密勘抄』の両方を挙げているのは、『顕註密勘抄』に抄出されている顕昭の注が現存の『顕昭古今集註』と異なるからである。現在のところ、『顕昭古今集註』とはまた別の古今集註が存在したのか、あるいは定家が独自に本文を抄出したのかわかっていないので、両方を参照しておく。

ただし、現存の清輔本諸本の注でも、『顕昭古今集註』や『顕註密勘抄』に重なるものはある。試しに清輔本の中で最も代表的な前田本で、『顕昭古今集註』及び『顕註密勘抄』を比較してみると、歌注だけでもおおよそ七十数ヶ所が一致する。しかし、今取り上げようとしている内裏切は、清輔本の他諸本にはない注を持ち、しかもそれが顕昭注であることに特徴がある。

同様に、他本にない注を挙げ、『顕昭古今集註』及び『顕註密勘抄註』と対応させてみよう。

【蓬左】

・歌番号一六九の頭注：メニハサヤカニトハ／目ニアサヤカニト／イフ或ハメニサタ／カニトモイフ

『顕昭古今集註』（該当注なし）

『顕註密勘抄』目にはさやかにとは、目にあざやかにと云也。其を略してさやかにと云、或はさだかにと云詞を、さやかにと云歟。

【見ぬ世の友】

・歌番号三六六の脚注：スガルナクトハ鹿／ヲイフナリ或モノ／ニハワカキシカトソ／マウシタル又サソ／リトイフ虫也是／スカルトイフト万／葉ニミヘタリハルナ／レハスカルナル（ママ。筆者記）ノヽホト／トキス（以下数字分不読）

『顕昭古今集註』（該当注なし）

『顕註密勘抄』すがるとは鹿をいふ。〈中略〉すがるとは、さそりをいへり。〈中略〉又万葉に、なればすがるなくの丶郭公ほと〳〵いもにあはずきにけり〈後略〉

【徳川黎明會所蔵・重叢】

歌番号四八七の頭注：チハヤフルカミトハ／フルキモノニ神ヲハ／チハヤフルカミトイヘ／リヒトツニハ神ノ具ニ／禰チハヤトイフモノ／アリソノチハヤヲキ／タルヲチハヤフルト／ソソテフルナトイフ／コトモ禰振ト云／也或ハ千磐被ト（「被」にカフルの振り仮名有り。また「破歟」の

注記あり。筆者記）／イヘリ神ノチカラ／ツヨクテチヽノイ／ハヲヤフルトイフ／コヽロナリユフタス／キトハ木綿ヲ襁ニ／スルヲイフタスキ／ハウチカクルモノナ／レハカクトイフカ／クトハコヽロニカク／トイフナリ

『顕昭古今集註』〈前略〉又順和名ニハ、祭祀具ニハ手繦タスキ（原文割注）襷同ヲバ不入。而衣服具ニ入之。褌チハヤ（原文割注）同入衣服不入祭祀具也。〈中略〉サレバイカサマニモ、カクルコヽロヲヨメリ。〈後略〉

『顕註密勘抄』ちはやぶるとは、ふるくより神をいふとしるせり。或は神具にちはやと云物あり。其ちはやをきて袖ふるを、ちはやぶるとはそへるなるべし。或は千磐破と云を、神の力の強くてちゃのいはをやぶると云心也と云べき歟。夕だすきとは、木綿を繦にするを云。夕しでとて、ゆふに四手をも懸たり。たすきはうちかくる物なれば、かくと云。君をかけぬ日は無とは、心にかくる也。〈後略〉

・歌番号四八九の脚注：スルカノクニヽタコ／ノウラトイフ所／ニハ風ツネニフキテ／ナミシキリニタツ／ソレニワカコヒヲ／ヨセテタコノウラ／ナミタヽヌヒハア／レトモキミヲコヒ／ヌヒハナシトヨム

『顕昭古今集註』〈前略〉タゴノウラハ風ツネニフキテ波タエズタツトコロトイヘリ。〈後略〉

『顕註密勘抄』駿河国のたごの浦は、風常に吹きて浪たえずたつ所といへり。これに我恋をよせてたごの浦浪はたヽぬ日はあれど、君をこひぬ日なしとよめる也。〈後略〉

・歌番号四九〇の脚注：ユフツクヨトハユフ／月夜ナリユフヘニ／ニシノ山ヘニミエテ／トクイツル月ナリ／ユフヘノ月（一字不読）／ヲカ辺（以下数字分不読）

『顕昭古今集註』〈前略〉ヲカ辺ノマツトイハムトテ、ユフヅクヨサスヲカトツゞクナリ。〈後略〉

『顕註密勘抄』ゆふづくよとは、ゆふ月夜也。上旬の月也。暮に西の山べにみえてとく入月也。ゆふづくよさすをかべの松といはんとて、〈後略〉

【藁叢】

・歌番号六九四の脚注：〈以上欠〉ハレルヨリ花サク／ニモトアラトハフル／キエタヨリハ木ハ／キトテコハ〳〵シキ／也ソレヲモトア／ラキ萩ト云其／中ニモ大ナルチイ／サキアレハ其ノチ／イサキヲモトア／ラノコハキトハヨメ／リモトアラノサ／クラト云コトア／リ櫻ハ他木ヨリ／ハモトアラシト云／ナラヒタリ

『顕昭古今集註』モトアラノコハギトハ、萩ノ枝ノモトアラキヲ云也。オホクマウス、ソレガ中ニモチヒサキガアルナリ。〈後略〉

『顕註密勘抄』もとあらの小はぎとは、萩の古えをば春やきてことしの若枝のおひかはれるより花はさく。もとあらとは、ふるき枝より花のさくをば木はぎとて、こ

ばく〳〵しき也。其を本あらの萩と云。其が中にも大なる、小きあれば、其の小きをもとあらの小萩とはよめり。もとあらのさくらと云事あり。さくらは他の木よりは木（ママ。筆者記）あらしといひ習たり。

・歌番号六九五の頭注：ヤマトナテシコハ／野ナトニヲイタル／ナテシコノ紅梅色／ニテ花ノサワヽケ／タル様ニテ常ノ／唐ナテシコニスコシ／タカヒタルナリ／唐ナテシコハ紅／ノコキウスキスワ／ウノコキウスキ白／色ナトミシリテウ／ツクシクサク又ヤマ／トナテシコヲイミシ／（一字分空白。筆者記）申人モアリ鐘愛／勝衆草故曰撫／子云々草ノ中ニ殊／ニイトヲモキ事／アレハナツルコト／ヲ人ノ子ヲ思フ〈以下欠〉

『顕昭古今集註』〈前略〉鐘愛勝衆草。故曰撫子ト云々。サレバナツルコトイフニヨリテ、人ノ子ニヨセテヨムナリ。〈中略〉ヤマトナデシコ、カラナデシコハ、花ノサマカハリタリ、ヤマトナデシコハ、花ノスガタアラキナリ。ソレヲイミジト申人モアリ。

『顕註密勘抄』（該当注なし）

・歌番号六九九の脚注：ミヨシ野ノヲホ川／ノヘトハ吉野川ハ／大ナレハ大河ノヘト〈以下欠〉

『顕昭古今集註』ミヨシノヽオホカハノベトハ、吉野川ノ辺ト云ナリ。大河也。〈後略〉

『顕註密勘抄』三吉野の大河のべとは、吉野川をばおほきなれば、大川のべとよめる也。〈後略〉

【藻鏡】

・歌番号八三三の頭注：ネテモミユトハウル／ハシキネイリテ／ミル夢也不寝テ／ミエケリトハウツヽ也

『顕昭古今集註』寝モミユトハ夢ナリ。不寝シテミユトイフハ、ウツヽナリ。

『顕註密勘抄』ねてもみゆとはうるはしき夢也。不寝してみゆとはうつヽ也。

【鳳凰臺】

・歌番号八五八の頭注：コエヲタニキカテ／ワカルヽタマトハ我／タマシヒナリタマシ／ヒヲタマトヨムナリ／人タマヲタマトモヨ／ムナリタマシヒノ出／故也

『顕昭古今集註』コヱヲダニキカデワカルヽタマトハ、ワガタマシヒナリ。魂ヲタマトヨムナリ。

『顕註密勘抄』玉とはたましひ也。人の魂をばたまとよめり。

【藻塩草】

・歌番号九五〇の頭注：カクレヰル所ヲ／云ナリ

『顕昭古今集註』吉野ハ深山ナレバ、世ヲ遁テカクレヰムト云也。

『顕註密勘抄』〈前略〉世をのがれてかくれゐむと云也。

・歌番号九五四の頭注：ウケクニアキスト／ハウキニアキス／ト云サムキヲハ／サムケクト云カ如也

『顕昭古今集註』　教長卿云、ウケクハウキニトイヘルナリ。サムケクナドイヘルガゴトシ。〈後略〉

『顕註密勘抄』　世中のうけくにとは、世のうきにと云詞也。〈後略〉

『見ぬ世の友』の三六六の脚注と『藻塩草』の六九五の頭注と『藻塩草』の九五〇の頭注を除いては、文言までほぼ一致していると言えよう。そうでないものも、内容はだいたい一致している。注の本文が、『顕昭古今集註』と『顕註密勘抄』のどちらに近いかを見てみると、四八七、四八九、四九〇、六九四、六九九、八三三の注は『顕註密勘抄』、八五八、九五四は『顕昭古今集註』というように両方の場合があるので、どちらとも言えない。逆に、『顕昭古今集註』『顕註密勘抄』とはまた別の古今集註の存在を推定させる資料となろう。

では肝心の古今集本文はどうであろうか。『古今集校本』（注八）で異同を調べてみる。初めに示しているのが切の本文である。

『布留鏡』　異同なし

『蓬左』　一七〇詞書「せうえう」……元永本同
　　他本「かはせうえう」

『見ぬ世の友』　部立名「別歌」……独自異文
　　定家本「離別歌」
　　清輔本「別離歌」

『徳川黎明會所蔵・藻叢』　四八九歌の次に墨滅歌一一〇六伝後醍醐天皇宸筆志香須賀本同
　　ノートルダム清心女子大学蔵黒川本四九一の次

『藻叢』　六九七歌作者名「きのつらゆき」……
　　伝後鳥羽天皇宸筆本・寂恵使用俊成本・建久二年俊成本同
　　他本「つらゆき」

六九七歌「あらす」……独自異文
　　他本「あらぬ」

『藻鏡』　八三三詞書「朝臣みまかりにける」……
　　元永本・志香須賀文庫本同
　　他本「朝臣のみまかりにける」

同　「とし」……独自異文
　　他本「とき」

八三三歌「うつせみのみそ」（「み」の横に片仮名で小さく「ヨ」）……独自異文
　　他本「よ」

『鳳凰臺』　八五九詞書「わつらひて」…独自異文
　　他本「わつらひ」

同　「もとへ」……伝後鳥羽天皇宸筆本同
　　他本「もとに」

『藻塩草』　九五一歌「ふみならしみむ」……
　　清輔本等同
　　定家本「ふみならしてむ」

九五二歌「すまはかも」……
静嘉堂寛親本・高野切・伝後鳥羽天皇宸筆本等同
他本「すまはかは」
同　「きこえさるへき」……
六条家本・伝後鳥羽天皇宸筆本・静嘉堂寛親本同
他本「きこえこさらむ」
九五四歌「こしは」……独自異文
他本「このは」

先ず、独自異文が多いことに気付かれるだろう。全部で六箇所もある。「こしは」のような明かな誤りがあることから察するに、この切の筆者の不注意によるものかと思われる。それほど大きな異同がないので、本文からこの切の系統を言うことは難しいが、おおむね清輔本系の本文であると言えよう。伝後鳥羽天皇宸筆本との一致が多いのは注意されるが、これだけの異同から推測することは控えたい。

では、次に書誌的に見てみよう。寸法・料紙を比較してみると、（注九）

『布留鏡』　解説に記されていないため不明
『蓬左』　二四・七×一五・一　斐紙
『見ぬ世の友』　二四・三×一四・八　雁皮質の斐紙
『徳川黎明會所蔵・藁叢』　二五・二×一五・六　宿紙
『藁叢』　二五・〇×一五・三　料紙不明
『藻鏡』　二四・二×一二・七　斐紙
『鳳凰臺』　二五・〇×八・九　斐紙
『藻塩草』　二五・三×一五・五　斐紙

と、だいたい縦の寸法は同じである。横が異なるのは、切断されたためであろう。料紙もだいたい同じである。「宿紙」とあるのは疑問だが、認定の困難な場合もあるだろう。

書式は、

『布留鏡』　一面九行　和歌二行書　詞書二字下り
『蓬左』　同　同　同
『見ぬ世の友』　同　同　同
『徳川黎明會所蔵・藁叢』　同　同　詞書なし
『藁叢』　同　同　同
『藻鏡』　一面八行　同　同
『鳳凰臺』　一面六行　同　同
『藻塩草』　同　同　詞書なし

と、一面の行数以外は同じである。一面の行数が少ない切は、横の寸法も短いので、切断されたと見なしてよいだろう。本来の形は、寸法およそ二五糎×一五糎、書式一面九行和歌二行書詞書二字下りであったと思われる。

次に筆跡を比較してみよう。この筆者の最も特徴的な筆法は、或る仮名文字の縦画を非常に長く伸ばし、しかも逆筆で入ることにある。『藻鏡』七行目『鳳凰臺』二行目の、「ね」文字の

第一画がそうなっている。『布留鏡』四、六、九行目『見ぬ世の友』五、九行目『徳川黎明會所蔵・藁叢』一、五行目『藻鏡』六行目『鳳凰臺』一、二行目『藻塩草』五行目の、「き」文字の第三画がそうである。『徳川黎明會所蔵・藁叢』七行目『藁叢』六、七行目『藻鏡』七、八行目『鳳凰臺』四、五、六行目『藻塩草』三、八行目の、「遣」を字母とする「け」文字の第三画もそうである。また「人」の第二画を丸めて書き最後をはねるところも、特徴がある。「人」字は、『布留鏡』二、八行目『見ぬ世の友』六、八行目『徳川黎明會所蔵・藁叢』六行目『藁叢』八行目『鳳凰臺』五行目に見い出せ、同じようになっている。また「乃」の第一画が細く第二画が極端に太いところも特徴的である。『蓬左』六行目『徳川黎明會所蔵・藁叢』四行目『藁叢』九行目『藻鏡』一、三行目『藻塩草』三、四、六行目に「乃」字は見い出せる。これ以上述べないが、他にも様々な点で筆法・字形・用字が一致しているので、この八枚の切は同一筆者と見なせそうである。

以上の点から、この八枚の切は種々入り乱れている内裏切のなかでも、ツレとして分類することができる。これらの切が切り出された元の本は、従来知られていた清輔本諸本以上に、顕昭の古今集注が加わったものだったらしい。その顕昭の注が、『顕昭古今集註』や『顕註密勘抄』で今日知ることのできるのは、先にも述べたとおりである。

二、基俊本との関わり

ところで先ほどはふれなかったが、『徳川黎明會所蔵・藁叢』に興味深い書き入れがある。墨滅歌一一〇六と四九〇歌の間に、

基俊本有之　本押紙書

とある。墨滅歌一一〇六が基俊本に有り、元は押紙に書かれていたという意味である。実際、古今集本文の校合のところで指摘したように、この歌はノートルダム清心女子大学蔵黒川本の校異より知れる基俊本（以後黒川本注記と稱す。尚、基俊本の原形は現存せず。）には二首後に、伝後醍醐天皇宸筆志香須賀本（以後志香須賀本と稱す）には同じ所に有る。志香須賀本も基俊本の本文を伝えている本であり、本文中の異本歌はすべて基俊本に存したとみなされている（注十）。黒川本注記は少し歌順が異なるが、この歌は基俊本にあったとみなしてよいだろう。

同様の注が『藻塩草』にある。九五二歌の脚注に、

基俊本／タツネコサラム

とあるのだが、これは第五句「きこえさるへき」が、基俊本では「たつねこさらむ」になっているという意味である。黒川本注記に確かにそうある。

これらのことから『徳川黎明會所蔵・藁叢』『藻塩草』の注が事実であり、この切の元の本は基俊本によって校合を加えられていたことがわかる。現存の清輔本諸本には基俊本の校合は

なく、注目すべき事実である。

基俊本によって校合を加えたものという観点で、再び内裏切及び清輔本古今和歌集の断簡を見直してみると、はたして他にも関連のありそうな断簡が二枚ある。基俊本の校合の存する伝藤原清輔筆四半切として、久曽神氏の『古今和歌集成立論　研究編』三八、三九頁（写真第九図）及び『同　資料編上』一八頁（写真第二九図）に紹介されている断簡である。内裏切とは呼ばれておらず、久曽神氏も「内裏切などとは別である。」とされている。

一枚目（写真第九図）は、仮名序の終わりに近い部分の切である。「かくこのたひあつめゑらはれて」の本文に対し「〈以上欠〉イフ。コノタヒアツメラレテ」、また「おほくつもり」の本文に対し「基丶丶カスツモリ」という校異を脚注に持つ。（但し「基」の字は写真では判読できないのだが、久曽神氏の翻刻に従っておく。）　黒川本注記と比べてみると、前者は全く一致し、後者も似通っている。

二枚目（写真第二九図）は幹林帖所載、巻一九（一〇五九～一〇六二）の切である。一〇六一歌の脚注に、「心コソ心ヲハカル心／ナレ心ノアタハ心／ナリケリ／基俊本在之／押紙」とある。この脚注の歌は、黒川本注記にはないが、志香須賀本にある。黒川本注記には脱しているが、この歌は基俊本にあったとみなしてよいだろう。

この二枚と先ほどの内裏切八枚は、はたして同一のものだろうか。先ほどの内裏切のように清輔本他諸本にない顕昭注があってくれればいいのだが、残念ながらこの二枚にはない。しかし書誌的に比較してみると、一枚目は二五・二×一五・六、一面九行書、二枚目は二五・三×一五・五、和歌二行書一面九行書と、先ほどの内裏切と一致する。料紙は、一枚目は久曽神氏がふれておられないため不明だが、二枚目は「鳥子の素紙」つまり同じく斐紙である。筆跡も、特徴的だった「け」「人」「乃」を始めとして、多くの点で似ているので、同筆とみてよいだろう。『徳川黎明會所蔵・薫叢』『藻塩草』と同じく基俊本の校合を持つこと、書誌的に、また筆跡の点でも一致することから、この二枚もツレと見なせそうである。

これで、つごう十枚のツレが判明したわけである。ところで、『徳川黎明會所蔵・薫叢』では、本文中に墨滅歌一一〇六が取り込まれていて、「基俊本有之　本押紙書」の書き入れが次の歌との行間に書かれているのだが、この現象はどう説明できるだろうか。「基俊本有之　本押紙書」の押紙がどの本に押されていたとするかによって、二つの場合が考えられよう。まず、この本の祖本に押されていたとしよう。その時書き入れの解釈は、祖本には基俊本にこの歌があると押紙に書かれていたのだが今は本文中に入れる、となるだろう。つまり、これらの切の切り出された元の本は、基俊本によって校合された原本ではなく、その転写本ということになる。または、基俊本に押されていたとしよう。すると書き入れの解釈は、基俊本にもこの歌が

あり基俊本では押紙に書かれていた、となるだろう。つまり、これらの切の元の本が依拠した本に既に墨滅歌があったということになる。現在基俊本以外にはこの墨滅歌を持つ本は伝わっていないのだが、そのような本があったのかもしれない。可能性としては、後者の方が大であるように思えるのだが、現時点ではどちらとも言えない。

実は、もう一枚仲間に加えたい切がある。『山内鮑霜軒旧蔵品並某家所蔵品・名古屋　昭和十年二月』の売り立て目録に見える内裏切である。巻五秋下（二六九～二七〇詞書）の断簡で、二六九歌の頭部脚部に注がある。ここは現存の清輔本諸本が注を持っていないところで、おそらく顕昭の注を加えたと思われるのだが、あまりに写真が小さすぎて判読できない。かろうじて読めるのは、脚注の初めの二行だけである。「ヒサカタノクモノウヘトハ大内ナリ」と読め、確かに『顕註密勘抄』に「久方雲上とは、大内也」とある。書式は、和歌二行書一面八行である。一面八行なのが気になるが、筆跡は似ているようである。しかしなにぶん決め手が少ないので、今は紹介するにとどめたい。

おわりに

先ず頭注脚注を手がかりにして、混乱した状態の内裏切の中から一連のツレを見つけ出した。これらは、顕昭の加注校定が加わっていると考えられている現存の顕昭本以上に、顕昭の注が加えられたものであった。更に、『徳川黎明會所蔵・藁叢』『藻塩草』の切の興味深い校合「基俊本云々」を手がかりにもう二枚のツレが見つかった。

ところで、『古今和歌集成立論　研究篇』（九五頁）に、顕昭本の項で、「中原光義の古本古今和歌集考によれば、光義は慶長抄本をも所持してゐたよしである。それは保元二年本を底本とし、基俊本で校合し、更に顕昭の加注も存した。光義の所持してゐた鎌倉古抄本は、前述の如く穂久迩文庫に伝存するが、慶長抄本は所在不明である。」と、所在不明の慶長抄本が紹介されている。本稿の考察でおぼろげな姿が浮かび上がってきた本は、もしやその慶長抄本と関わりがあるのではあるまいかと思われる。

しかし、なにぶん私が見ることができたのは僅か、内裏切と呼ばれているものと清輔本古今和歌集の断簡併せて三十枚足らずである。そのうちツレと判定できたのは十枚にすぎない。世にはまだ、出版されていないため見ることが困難であったり、公開されていない内裏切及び清輔本古今和歌集断簡が、多く残っているはずである。それらも同様の方法で調査して行けば、もっとツレが見つかるであろう。そうすれば、今おぼろげに推定している清輔本の姿が、更に鮮明に見えてきそうである。また、誰がいつごろどのような経緯でこの本を作ったか、という疑問にもあるいは答えが出せるかもしれない。書風は鎌倉時代

を下らないと見えるので、顕昭自身ではないにしてもその頃までの六条家の誰かであろうとは思われる。だが、今の段階では推定することも困難である。残りの内裏切と清輔本諸本との関係も含めて、そのことは今後の課題としたい。

（注一）　久曽神昇　『古今和歌集成立論　研究篇』（昭和三十六年　風間書房）　九一頁

（注二）　山岸徳平　「家長本古今和歌集」　『実践女子大紀要』第五集　昭和三十二年九月

（注三）　古筆手鑑大成第一巻『鳳凰臺（徳川美術館蔵）』他　『古筆手鑑大成』　編集委員会編　昭和五十八年刊　角川書店

（注四）　『昭和新修日本古筆名葉集』　吉沢義則編　昭和二七年八月刊　白水社

（注五）　（注一）に同じ。

（注六）　『布留鏡』　古筆了任編　大正十四年十月～昭和二年三月刊　布留鏡社（昭和三年に一括再刊）

『蓬左』　徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇二　徳川黎明會編　昭和六一年二月刊　思文閣出版

『見ぬ世の友』　是沢恭三編・別冊解説　昭和四十八年三月刊　平凡社

『藁叢』　徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇三　徳川黎明會編　昭和六一年八月刊　思文閣出版

『藁叢』　河野記念館所蔵

『藻鏡』　バーク・コレクション中の手鑑

『鳳凰臺』（注三）に同じ。

『国宝手鑑藻塩草』　京都国立博物館編　昭和四十四年　淡交社。または『藻塩草』　古筆手鑑大成第四巻　昭和六十年刊　角川書店

なお、出版されていない手鑑の切は最後に写真を掲載する。

（注六）　『顕昭古今集註』・『顕註密勘抄』の本文は、『日本歌学大系』別巻四・五　昭和五五、五六年　風間書房

（注七）　『古今集校本』　西下経一・滝沢貞夫編　昭和五二年　笠間書院

（注八）　『藻鏡』『藁叢』以外は各手鑑の解説によった。

（注九）　（注一）三四頁

（本学大学院博士後期課程）

『裏表』河野記念館

web公開に際し、画像は省略しました

『鏡』パーク・コレクション

web公開に際し、画像は省略しました